
僕らの歩む道

大輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕らの歩む道

【Nコード】

N0355B

【作者名】

大輝

【あらすじ】

両親を亡くした幼馴染みの主人公、高岡大樹と、奄美千草。同じ過去を持つ二人の人生と、微妙な恋愛関係を書いた、青春恋愛ものです。

〈序章〉「過去」(前書き)

初めての投稿なので、誤字や誤り等あったらどんどん指摘お願いします。

あと、本編は恋愛ものですが、微妙な恋愛なので、あまり熱い恋は期待なさらないようお願いします。

「序章」 「過去」

キキーツツ

激しいブレーキ音。

それは強い雨の日。

サイレンの音が鳴り響く中、幼い俺達はただ見ていることしか出来なかった……

「あれからもう十年か……」

重い頭を上げ、むっくりと起き上がった。

俺の名は高岡大樹^{たかおかだいき}十六歳のバリバリ高校1年生だ。

そして…

「たっかおお、ご飯出来たよー」

俺の事を

「たかおお」

と呼ぶのは奄美千草^{あまみちぐさ}俺の幼馴染みで、俺が通う学校の同級生。

でもそれ以上に、俺達には切っても切れない関係があった……

それは雨の強い日、俺達は自分達の親と一緒に買い物に来ていた。
俺の親と千草の親はとても仲がよく、一緒に買い物に行く事もしばしば。

「いやあゝ、買いすぎちゃったなあゝ。どうです？ 今日家で鍋パーティーでも？」

「いいですねえゝ、クイツと一杯やりますか？」

陽気に話す父親達。見かねて母が、

「ダメでしょ！ あなた。今日は……」

「ああっ、そうだった！ すんません誘っておきながら……ちよつと今日は用事が……」

「いいですよゝではまた今度という事で……」

4人が何を話しているのか、全く分からない当時6歳の俺と千草は横断歩道を渡ろうとした……その時！

「危ない！！！！！」

振り返った俺達はドンッと前に押され、転ぶ。

「何をするんだ！！ な……に……が」

そこには沢山の血。

俺達の親は突然この世から去った。

死因は視界不良、飲酒運転によるドライバーのハンドル操作の誤り。事故死だった。

しかも4人とも。

笑う人もいるかもしれない。無理も無い。俺達の親は4人一斉に俺達を押し、助け、挙げ句に死んだのだ。

そんな事も十年経った今では昔話。

身寄りの無かった千草は、俺と一緒に祖母の家に。

祖母が亡くなり、中学生の俺達は同居する事に。
そして今にあたる

「朝ご飯冷めちゃうよー!!」

残ったのは両親が残した莫大な遺産のみ。
千草も同じだ。

ゴツンッ

不意に頭に衝撃が伝わり、頭を抱え悶絶する俺。

「もうっ、朝ご飯冷めるって何回言わせるのっ!早く起きて!!」
「痛ってえなあゝ殴るこたあねえだろ?」

ねぼけながら千草に呟く。

「遅刻するよっ!ち・こ・く。早く早く」

と、布団の上にいた俺を布団ごと吹っ飛ばす。

「痛ってえ」

壁にぶつかり、うめく俺。しかし、

「今日から新学期でしょ?! 早めに行こうよ」

そして俺達の歩む人生が始まる。

〈序章〉「過去」(後書き)

実はこれは過去に一回原稿用紙に書いたものを、少しアレンジした
ものです…長いです

〈第1章〉「転校生!?!」(前書き)

少し長くなってしまいましたが、ご了承ください

「第1章」 「転校生!?!」

朝、まだ痛みの残る頭をさすりながらテーブルに着く。
テーブルには、朝定番の料理がずらりと並んでいた。

「まったく、遅れそうならこんなにたくさん作らなくても……」
などと、ブツブツ言っていると台所から

「じゃあ私もう朝ご飯食べ終わっちゃったから先に行くね」

「はあ? お、おい! ちょっと待てよ!!」

「待ったないよ!! じゃね!!」

玄関の閉まる音が聞こえる。

しかも丁寧に鍵閉めていきやがった!

「あ、あのやろ」

沸き上がる怒りを抑えながら、急いでテーブルの上のものを掻き込む。

家から学校まで約三十分、しかし時計は八時近くなっていた。

「遅刻制限は八時二十分、飛ばせばギリギリ間に合うか……」

制服を着て、バッグを持ち、急いで家から飛び出した。

自転車で猛スピードで走る。

「やばいやばいやばいやばいやばいやばいやばい……」

俺のクラスの担任は何故か遅刻にうるさい。しかも恐い!!!
何としても遅刻だけは避けなければ!!!

死にもの狂いで、ようやく学校に着く。

「まっまだ八時十五分、間に合った」

自分のクラスは一階の職員室の向こうだ。

安堵の表情を浮かべながら校内に入ると、女の子が一人で立っていた。

「ん？ 誰だありや？ うちの生徒じゃなさそうだな」

辺りを見回しながらうろうろしているその女の子は、一言で言うところ可愛い。

長いロングヘアにすらっとした体格、文句無しだ。と、見知らぬ人を評価してしまう自分が情けない。

「っと、ぼーっとしてる場合じゃない！でも声はかけておくか……」

どこぞのお嬢様だったら面倒だ。と思う黒い自分がいる。

「どうしたの？この学校に何か用かな？」

「あっあの！ しっ職員室は……どこでしょうか？」

「ああ！職員室ね！すぐそこだよ！俺も通るから一緒に行こう！！」

「あっありがとうございます」

「いいよいいよ！さっ早く行こう」

遅刻する！！

はやる思いを胸に、職員室へ連れて行く。

「ありがとうございました！！！」

着くなり、ぺこりと頭を下げる。

「だからいいよ！じゃね！！！」

ピューっと風のように自分のクラスへと向かう。

もう朝のホームルームが始まっているようだ。

後ろのドアからコソコソと自分の席に向かうが……

「新学期そうそう遅刻とは余裕だな？高岡あ！！！」

鬼教師の激が飛ぶ。

「は、はい！！！すんません……」

クラス中が笑いに包まれる。顔を赤くしながら自分の席に座る。

「まったく！まあそういう事で今日から新しい転校生がこのクラスに来るからな！！仲良くするように！ちよっと呼んで来るから待ってろ！」

少し間が空き、ガラッとドアが開く。

入って来たのは鬼教師と、もう一人……さっきの女の子だ！

「転校生だったのか…分からない訳だ」

「まずは自己紹介だ！じゃあ名前を言ってもらおうかな」

「は、はい！え、えっと、霞麗奈かすみれなと言います！よろしくお願いします！
す！！！」

そしてこの日から俺の大変な学校生活が始まる……………

〈第2章〉「不穏な空気」 (前書き)

またまた長くなってしまいました……ご了承下さい

「第2章」 「不穏な空気」

「じゃあ席は…っと高岡の隣が空いてるな！あそこに座って貰えるかい？」

「は、はい！分かりました！！」

「えっ！？」

まだうつむき加減だった俺には反論する暇も無く、霞麗奈は俺の横の席にちょこんと座っていた
と、言うのも実はこのバレにくい席が気に入っていた。クラスの一
番後ろかつ、窓際、さらに隣に誰も居ないというこの場所は、授業
中居眠りするのに最適だったからだ。

面倒な事になった…と頭を抱えていると、霞麗奈の方から話しかけてきた。

「あのっ！今朝はありがとうございました！！」

「ああ、それもう三回目！別にいいって言ってるだろ」

「は、はい…すいません…」

何を言ってるんだ！俺は！！転校して来たばかりだというのに…

あゝもう！と後悔しつつ、挽回しようとする事を思いつく。

「そうだ、霞さん！まだこの学校の事、あまり知らないんだよね？
昼休みにでも案内しようか？」

大樹は必死だった。大抵ここで

「ありがとう！でもちょっと用事が…また今度」
などと、断られるだろうと思っていたが、霞は違った。

「ええ！本当？私も出来ればお願いしたいと思ってたところなんだ
！！ぜひぜひ、お願いします！！！」

わざわざ席を立ち、ペコリとお辞儀をする。この子可愛いけど、いちいちアクションが大きいなく。そんなことを考えながら、昼休み校内を案内することになった。

「さつてと、昼休みか…ちゃっちゃと飯食って麗奈さんを案内しないと……」

俺が

「麗奈さん」

と呼んでいるのは、本人の志望からだ。呼ぶなら名前の方がいいそうだ……

「あれ？そういうえば、麗奈さんどこに行ったんだろう？」

あくび+伸びをしている間にどこかに行ってしまったようだ。

「うーん、まあいいや！今のうちに！！」

持参（奄美作）の弁当を数分で平らげ、まずは隣のクラスの千草に聞き込みをする。

「なあ千草、俺のクラスに転校してきた……」

「ああ！麗奈ちゃんね！！さっき他の女子と歩いてるのを見たけど？」

情報早！！いや、それより他の女子と歩いてたってどういうことだ？今日一日俺以外の人とは話してないはず……

どこかの推理小説のように、謎が解けていく。そして、ある結論に達した時、

「まずい！！！！」

と、自慢の足の速さで猛スピードで走る。

実は大樹のクラスでは教師が知らない裏があった。いわゆる

「いじめっ子」

達によるいじめだった。

男子は至って平和なのだが、女子の方は、そのいじめっ子によって泥沼と化してした。

「あいつらにきつと……くそっ！！」

存在を知らながらも、なぜ注意してやらなかった！！と、自分で自分を責める。

そうしてるうちに、案の定いじめっ子に囲まれた麗奈を見つける。

「なあんかむかつくんだよねえ！その感じい！。大樹君といちゃつ
いちゃってさ」

「やっちまいましようよ！！こいつっ」

「や、やめて下さい……」

「止めると思ってるのかぁ？ばぁか」

言葉で責め続けるいじめっ子達。麗奈は今にも泣き出しそうだ。
我慢しきれなくなった大樹は、

「おいっ、そこで何をしてるんだっ！！！」

思いつきり先生の声に似せて叫ぶ。

「ヤバイっ、先公だっ」

ばたばたと逃げ出す不良達。すかさず座りこんでいる麗奈に駆け寄る。

「おいっ、大丈夫かっ！何かされてないか？」

「は、はひ！大丈夫です……大樹さんっ！？怖かったですう」

半べそかいて抱きつかれて思わず赤くなる。

「ばっ馬鹿！一人になるからこういう事になるんだよ！！もう離れるなよっ」

言葉の意味を深く考えない大樹は、今発した言葉が何を意味するのか、全く知るよしもなかった。

そして、物影からこちらを伺っている存在にも……………

〈第3章〉「仲良く!」(前書き)

更新が大幅に遅れて申し訳ございません!

いろいろと多忙でして…

これからはバシバシ書いていくつもりですので、どうぞ宜しく願
いします

ちなみに今回は短いです…

「第3章」 「仲良く！」

「なーんだ、血相変えて走って行ったから何事かと思えば……あれは確か…転校生の…」
物陰にいたのは千草だった。

「まっ、アイツは昔から正義感ありありだもんね」
スタスタと立ち去っていく千草。

「まあ、大丈夫ならそれでいいんだ。じゃあ改めて校内を案内しようか？」

「……………」

返事が無い…よく見ると顔が林檎のように真っ赤になっていた。

「…麗奈さん？」

「へっ？あわわわっすっすいませんっ学校案内をして下さるんですよねっ！お願いします！」

「四回目…」

などと思いつつ、

「それじゃ、行こうか！」

「はいっ！」

大樹と麗奈の二人は校舎内をまわって行く。

職員室…、事務室…、放送室…、生徒会室と、大樹は丁寧に説明を加えながら校内をまわる。

そして最後に着いたのは、屋上だった。

「ここは…？」

麗奈が不思議そうに聞く。

「ここは俺の昼寝ポイント第1号！教室にいない時は大抵ここにいるから」

屋上のドアを開ける。

そこにいたのは千草だった。

「あら？大樹に麗奈さん！屋上に何か用？」

「またお前か…ったく、人の昼寝ポイントにことごとく現れやがって…」

「いいじゃない、別に。あんたこそ私に付いて来ないでよ」

二人の論争を鎮めたのは麗奈だった。

「あ、あの一。千草さんでしたっけ？」

「いかにも！私が千草よ！」

「自分で名乗るなよ…」

「大樹さんとはどういったご関係で？」

俺はぶっと吹き出しそうになった。馬鹿な俺でも、この意味はよく分かる。

千草も、

「はーん、そういう事ね！大樹とはただの幼馴染みよ！心配しないで！」

麗奈はほっと軽い溜め息をついた。

「でも油断してると横から盗られちゃうよ！」

今度はむっとなる麗奈。

「こ、これからどうなるんだ……」

これからの学校生活に不安を感じながらも、少し嬉しい気にもなってしまう大樹であった。

〈第3章〉「仲良く!」(後書き)

これから新キャラなどいろいろなバリエーションを考えております。
できれば感想やアドバイスなどをお願いします。

〈第4章〉「陰…から…見てる…」 (前書き)

四ヶ月ぶりの更新です。

大変申し訳ありません。

今後はどしどし書いていくつもりですので、よろしくお願いします。

「第4章」 「陰……から……見てる……」

「あゝ、あのゝ」

「黙ってて!!!!」

……………情けねえゝ

ここまで自分が情けないと思ったのは小学生の時に近所の窓ガラス割って逃げ出した時以来だぜ。

今俺の目の前では論争が続いている。

右でちよつと偉そうに話しているのは奄美千草。俺の幼馴染みだ。左には転校生の霞麗奈がいる。おとなしそうな外見とは裏腹に、かなり嫌味なことを言っている。

はあゝ、どうしたものか。そんな事を考えていた矢先、

「ん?」

屋上のドアの前に人影が見えた。ドアを少し開いてこっちを見ているようだった。

「誰だ?」

ドアを開けようと近付くとパタパタと逃げて行った。

「……………誰かに見られていたか。まあ別に悪い事していた訳じゃない

いからいいけど」

キンコンカンコン

その時チャイムが鳴り響いた。

「ぜー、ぜー、と、とにかく大樹にはあまり近付かないことね…」

「はー、はー、そ、それは私の勝手じゃないですか…」

…まだ続いてる…チャイムが聞こえなかったのか？

「はいはい二人とも、もうチャイムも鳴ったし、教室に戻るぞ！」

こうして戦いは幕を降ろした。

それにしてもドアにいた人は誰だろう？

放課後…

「ん？まただ」

一日ずっと誰かに見られてるような気がする。

後ろの壁から気配がする。

「どうしたんですか？大樹さん」

隣で不思議そうに眺める麗奈。千草は委員会があって一緒ではない。

「いや、何でもないよ。」

「そうですか…それじゃまた明日学校で！」

「ああ、また明日な」
下駄箱で麗奈と別れる。

校門を出て一人で歩いていると…

「まだだ………」

後ろの電柱から誰か見てる。誰だ？屋上で見てた奴と同一人物か？
なんとなく早歩きで歩いてみる。べつ、別に怖い訳じゃないぞ！！
こうなったら正体を暴いてやる！！

近くの暗い路地裏に入り込む。追跡者は慌てて追って来た。かかった！！

「あんた、誰だ？」

「！！！！！！！！！！」

後ろから不意に声をかけられたせいか、驚いているようだった。

「あんた、俺の事一日中付け回してただろ？……誰だ？」

「あちゃー、ばれちゃったか…」

この喋り声…まさか！！

「この顔を忘れたとは言わせないわよ！」

「おっ、お前！！風香！！」

「思い出した？」

驚くのも無理はない。こいつの名前は高岡風香たかおかふうか俺の妹にして天才。しかも生意気。

こいつは二年くらい前からアメリカの学校行っていた。それほど頭がいい。

……俺よりも…

「何でお前がここに?!」

「あら、もうアメリカ学校卒業して帰って来ただけじゃないの。嬉しい?」

「嬉しいも何も!! アメリカの叔父さんの家に住んでたんじゃなかったのか?」

「叔父さん……死んじゃった……」

「!?!」

何て事だ!! これで高岡家は俺と風香二人だけになってしまった。

「叔父さんが残してくれたのは莫大な財産だけ。しかも死ぬ前に日本の大樹の銀行口座に振り込んだらしいよ」

「そ、そうか」

ほっ、何とか家計は大丈夫そうだ。ってそんなこと言ってる場合じゃない!!

「叔父さん最後に何か言ってたか?」

「スシ食イタイ…だって」

はあ？死ぬ間際の最後の言葉がそれかい！！

まったく叔父さんには困ったもんだ。今頃天国で寿司をたらふく食べているのだろうか？

「取り合えず家に帰って詳しく話を聞こう。それにしてもお前、学校にまで来ること無いだろう！！」

「学校？何のこと？」

「とぼけるなよ！俺の事ずっと見てただろう？」

「えっ？ついさっき飛行機で着いたばかりで、大樹の学校までタクシーで送ってもらったんだよ？」

と言って飛行機の切符の半券を見せる。確かに到着時刻が二時間くらい前だ。

「じゃ、じゃあ……あの視線は………」

「気のせいじゃないの？」

あの視線の正体は誰なのか？確かに感じたし、人影も見てる。

そして……今も……感じる……

「陰……から……見てる……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0355b/>

僕らの歩む道

2011年1月13日02時33分発行